

中村恭一（著）

大腸癌の構造（第2版）

平山廉三

元埼玉医大教授・消化器外科学

初版から20年余を経ての大改訂のもと、「大腸癌の構造第2版」が上梓された。

著者の中村は常に、「腫瘍発生の基本概念」を公理として要請し、研究の出発点とする。「細胞分裂の際の突然変異細胞が排除されずに増殖するとき癌巣が形成される。よって、細胞分裂のあるすべての所に癌が出現。胃癌、大腸癌では正常粘膜からのいわゆる‘de novo 癌’が大部分。良性限局性病変からの胃癌や腺腫由来の大腸癌もあるが少ない。胃癌については‘de novo 癌’と良性限局性病変との比率、大腸癌では‘de novo 癌’と腺腫由来の癌との比率こそが重要」。単純・明解である。40年前、わが国の癌の大御所・超大家たちはこぞって「胃潰瘍、胃ポリープ、胃炎などを胃癌の前癌状態」と決めつけて胃切除をしまくった。中村は先の公理の演繹から「胃癌の大部分は‘いわゆる正常粘膜’から生じ、胃潰瘍などとは無関係」なる事実を証明し、「前癌状態」なる超大家たちの迷妄を完膚なく否定して葬り去った経歴をもつ。

胃癌の前癌状態に決着をつけたころ、Morson らによる adenoma-carcinoma sequence（腺腫-癌連続学説；以下 ACS とする）が世界中に流布しはじめた。大腸癌の大部分は‘de novo 癌’が占めるはずと考える中村は、‘de novo 癌’と‘腺腫癌化’の比率、ACS 下支えの dysplasia/adenoma の異型度分類と癌組織診

断基準に疑義を投げかけて、「大腸癌の構造」初版を出版した。ここでは、真実の大腸癌組織発生、ならびに、望ましい大腸癌の組織型分類案を予報しているが、そのあと中村は、「大腸癌の大部分は‘de novo 癌’」という証拠をそろえ、ACS の矛盾、誤謬を力強く指摘し続けたが、今回の第2版において、「白壁フォーラムにおける報告：2 cm 以下の大腸癌 4,959 例の統計的解析の成績」を詳細に解説し、ACS の息の根を止めた。さらに、大腸癌組織診断基準に関する国際的会合における「国際コンセンサス分類」（ウィーン、1999）の不備を指摘して渾身の分類案を示し、ACS ゾンビが息を吹き返すのを封じた迫力ある提案となっている。また、退官最終講義で共鳴を得た「異型度係数による癌組織診断基準」も完成された姿が盛られている。

医学書においては、推論にかかわる約束事（前提肯定など）の破られた非論理的議論、偏見による議論、錯覚の追認、結論先にありきの推論も多いなか、本書では、愚直なほどの注意が推論過程に払われている。論理的整合性にあふれる本書は、まずは医学者、学生諸君にとって、研究の方法のお手本となる。

余録の一つ。中村の記述には、見事な logical consistency が見て取れ、過度に細分化してとらえた所見や、分断的な結論が聊かも見当たらない。中村の友人の多くは、……癌研病理の最奥の部屋で、斜めに構えて、夏

でもセーターを着て、いつ自宅を訪れても顕微鏡を眺めていて、と中村の観察への集中力、持久力を強調する。実は、中村の切片凝視の時間は短い。そのあとの、切片を眺めつつの黙思・瞑想にこそ、長い時間が割かれる。概算すると、約50年で約20万時間の瞑想が凝縮して本書が生まれた。中村の独特な黙思・瞑想と、雪舟の描く達磨（慧可断臂図）とは重なる。壁面が達磨の眼前20 cm 弱に迫るように、中村は接眼レンズ下20 cm の標本をボンヤリと見渡しながらいを巡らす。そのとき、連想・妄想が消えて、癌が真相を語り始める（試しに、眼前20 cm 弱に4本の指を立て、この指が5本、6本に見え始めたとき、連想・妄想も、喜怒哀楽も消え去ってしまう、という極意がある由）。

1960年代から、わが国の消化管の癌診断学が世界をリードし続けた。この大戦果の多くが、個性溢れる中村の癌科学思想、およびこれに共鳴した同志によって成就した。中村による「胃癌の病理」「胃癌の構造」「大腸癌の構造」に今回の改訂版が加わったことで、日本の診断学が完勝を続けたころの「作戦書および戦勝の記録集」の完結をみた。後世に残る国宝級の著書である。

●B5/頁232/2010年/定価12,600円
(本体12,000円+税5%)

[ISBN978-4-260-01143-3]

医学書院 刊